

パーリ文献に現われたいわゆる 「七仏通誡偈」

森 祖 道
(愛知学院大学)

1 はじめに

本稿の執筆に当り、筆者は初めてパーリ語のコンピュータ大蔵経を全面的に活用して、関連する語彙の検索を行なった。今回利用したのは、現在存在している三種類の版⁽¹⁾の内、タイ・マヒドン(Mahidol)大学版(以下、MD 版)であるが、周知の通り、本版はタイ版のパーリ三蔵とアッタカターのすべてに加えてティーカーの一部等をも収めたものである。従って本版は、PTS 版の三蔵だけしか収めていないタイ・ダンマカーヤ財団(Dhammakāya Foundation, 以下 DK 版)よりは、この点で優れてはいるが、しかしその反面、本版はその底本がタイ版であるために、従来の研究史上の蓄積を活用しようとする時には、そのテキストの母体である PTS 版との照合を一々行なわなければならない、かえって不便な面もある。また上に述べた如く、MD 版ははまだティーカーに関してはその一部しか収めていないので、この点でもなお改良の余地がある。しかしながら所収の全テキストに関しては、語彙検索の入力方法さえ誤まらなければ(実際には細かい点で、これがなかなかやっかいである)、その検索能力と精度は絶大で、特に或るテキストに或る語句が存在しないことを検証する際には、従来の手作業に比べて、その成果は正確かつ迅速で信頼に値する。

		三 蔵	アッタカター等
善	kusala	309	978
	kalyāṇa	113	290
	puñña	142	562
	bhadda	69	171
	subha	119	380
	sādhū	71	221
	sucarita	169	85
	attha	267	1094
悪	pāpa	199	544
	akusala	87	531
	agha	45	103
	asādhū	9	21
	anattha	44	200

しかしその反面で、コンピュータ検索はその結果が網羅的に過ぎて、かえって研究の進捗を阻害する場合もあり得るのではないかと憂慮する。例えば今回、既存の諸辞典や諸研究⁽³⁾を参照して、先ず、本学会のこの度の共通テーマのキーワードである「善」と「悪」という二語の原語を、それぞれ数語ずつに絞って検索したところ、その結果は上の表の如く膨大な数に上った（それぞれの語の語形変化ごとの単語自身、並びにその単語を先頭とするすべての複合語の総数）。

上の数字は各語句の種類を表わすだけのもので、各語句のテキスト全体における出現回数は、平均、さらにその五倍にも十倍にも達するであろう。勿論、上の膨大な用語例の多くは、仏教倫理や教理思想の術語としての善・悪とは何の関係もないものであろう。例えば「天気が良い」とか「悪い道路」と言った様な表現例に類するものであろう。しかしすべての用語例の中から先ず必要な該当用語例を選別することから研究を開始しなくてはならず、これでは検討が網羅的に過ぎて、かえって実際的ではない。この様な点はやはり今後に残された、方法論上の新しい課題であろう。いず

— 166 — バリー文献に現われたいわゆる「七仏通誠偈」（森 祖道）

れにしても、上記の様な試行錯誤を経た上で、この小稿では「七仏通誠偈」（以下、七仏偈）をめぐる問題に絞って論述することとした。

2 三蔵に見られる七仏偈

周知の様に、七仏偈は『法句経』中の一偈（例えばパーリ Dhammapada 第183偈）としてよく知られている。即ち

sabba-pāpassa akaraṇaṃ	諸惡莫作
kusalassa upasampadā	衆善奉行
sacitta-pariyodapanam	自淨其意
etaṃ Buddhāna sāsanaṃ.	是諸仏教

という偈がそれである。法句経は全文が韻文より成る經典で、Suttanipāta 等、他の多くの韻文經典と共に原始聖典中の最古層に属するものと考えられている。従ってそこにはこの偈に対する何の注解コメント⁽⁴⁾の類も未だ見出されない。

次にこの七仏偈は、同じ原始聖典中の Dighanikāya (MD 版 vol. 10, p. 57 ; PT 版 II, 49) にも一度だけ現われる。即ちそこでは、この七仏偈は法句経のそれ（第183偈）に直接続く 2 偈、つまり第184・185偈と共に、過去七仏中の第一 Vipassin がビク・サンガにおいて Pāṭimokkha として誦唱した (uddisati) ものとして記されている。しかしここでも、この偈に対する何も注解も述べられていない。因みにコンピュータ大蔵経による検索の結果では、膨大なパーリ三蔵の中に、以上の二ヶ所以外には七仏偈はどこにも記述されておらず、何のコメントも未だ記されていない。ただし法句経中の今述べた 3 偈の記載の順序が、Dighanikāya の場合には第183偈と184偈の順が逆になっている点、及びこの 3 偈が早くも過去七仏中の Vipassin と結びつけられて語られている点は注目留意に値する。この

2 点は後に再び取り上げる。

3 「蔵外の三書」に見られる七仏偈

元来は異系統の文献であったものが、後にパーリ上座部に採り入れられたと考えられている Milindapañha (Mil), Peṭakopadesa (Peṭ), Nettipakarāṇa (Nett) という、いわゆる蔵外の三書⁽⁵⁾の内、七仏偈を引用言及しているのは Peṭ と Nett の二書だけである。この二書は共に、Mahā Kaccāyana の作と伝説される姉妹書であり、内容的にも類似共通する点が多々存在すると指摘されているが、Peṭ の方が古く、大体、西紀前 2 世紀の後期から前 1 世紀の初期頃の成立、Nett の方は前 1 世紀初期以降の成立と看做されている⁽⁶⁾。この二書の中で、Peṭ では 1 回（別に後半偈だけの引用が 1 回）、Nett では 4 回にわたって問題の七仏偈が引用されている。先ず Peṭ の場合は (PT 版 p. 54), Sāsana-paṭṭhāna-dutiya-bhūmi (教えの発足の第二地) 中に自説 (sakavacana) の一つとして、この七仏偈が引用されているが、しかしこれに対する何らの注解もそこには見出されない。またこれとは別に七仏偈の後半だけが Peṭ (PT 版 p. 91) に引用されているが、ここにもやはり何のコメントも見られない。

次に Nett の場合は、七仏偈が合計 4 回引用されているが、その中、第 1 の場合 (PT 版 p. 43f.) に初めて七仏偈の注解が登場する。即ちその一節は次の通りである⁽⁷⁾。

「諸惡莫作」とは、三つの惡行 duccharita のことである。即ち身惡行 kāyaduccharita, 語惡行 vacī-d., 意惡行 mano-d. とである。これらは十不善業道 akusalakammaṭṭhā : 殺生 pāṇātipāta, 偷盜 adinna-ādāna, 諸愛欲における邪行 kāmesu micchācara, 妄語 musāvāda, 兩舌語 pisunā-vācā, 麁惡語 pharusā-vācā, 綺語 samphappalāpa,

貪欲 abhijikā, 瞋恚 byāpāda, 邪見 micchā-diṭṭhi とである。それらは〔また〕2つの行為 kamma, 即ち心 cetanā と心所 cetasika とに〔分けられる〕。ここで殺生と両舌語と麁惡語とが瞋等起 dosa-samuṭṭhāna であり, 偷盜と邪淫と妄語とは貪等起 lobhā-s. であり, 綺語が痴等起 moha-s. である。以上の7つの行動 kāraṇa が心行 cetanākamma である。〔また〕貪欲は貪不善根 lobha-akusala-mūla であり, 瞋恚は瞋不善根 dosa-a.-m. であり, 邪見は邪道 micchā-magga である。以上の3つの行動が心所行 cetasikakamma である。これらを心行・心所行という。

不善根という行為 payoga に赴く場合には, 4種の非行 agati に赴く, 即ち欲 chandā か瞋 dosa か怖 bhaya か痴 moha か〔のいずれか〕である。ここで欲非行に赴くのは貪等起であり, 瞋非行に赴くのは瞋等起であり, 怖及び痴非行に赴くのは痴等起である。ここで貪欲は不淨 asubhā〔の觀察〕によって捨断され, 瞋は慈 mettā によって捨断され, 痴は智慧 paññā によって捨断される。同様に〔また〕貪欲は捨 upekkhā によって捨断され, 瞋は慈と悲 karuṇā によって捨断され, 痴は喜悅 muditā の捨断によって滅没する。これによって釈尊は「諸惡莫作」と説かれたのである。

〔また〕諸惡とは8つの邪惡: 即ち邪見 micchā-diṭṭhi, 邪思惟 m°-saṃkappa, 邪語 m°-vācā, 邪業 m°-kammanta, 邪命 m°-ājiva, 邪精進 m°-vāyāma, 邪念 m°-sati, 邪定 m°-samādhi のことである。これが諸惡と言われる。これら8つの邪惡をなさないこと, 行なわないこと, 違犯しないこと, これが「諸惡莫作」と呼ばれる。8つの邪惡を捨断する時, 8つの正善 sammatta が生起する。8つの正善をなし, 行ない, 成就すること, これが「衆善奉行」と呼ばれる。「自

浄其意」とは、往古の道 atītamagga の修行を実践しそれを思念することである。心が浄化された時、五蘊の浄化が出現する。故に世尊は次の様に説かれた「比丘たちよ、心の清浄を実現するために、如来は梵行を実行するのである」と。〔さらここに〕2種の浄化がある。即ち蓋 nīvaraṇa の捨断と随眠 anusaya の断絶とである。また2種の捨断の地がある：見の地 dassana-bhūmi と修の地 bhāvanā-bh. とである。ここにおいて洞察 paṭivedha によって浄化するもの、それが苦 dukkha であり、これに基づいて浄化するもの、それが集 samudaya であり、それによって浄化するもの、それが道 magga であり、浄化されたもの、それが滅 nirodha である。これらは四諦である。それで世尊は「諸悪莫作」と説くのである⁽⁸⁾。

大変長い引用訳文となったが、以上の様に Nett において七仏偈は初めてアビダルマ教理——それも初期アビダルマ教理——と結びつけて解説されているのである。また八正道や四聖諦など原始仏教以来の基本的実践教理とも関連づけて説明される様になった点も注目すべき特徴と言えよう。

次に Nett における七仏偈の引用の、残りの3例についてであるが、これら3例（PT 版 pp. 81, 171, 186）はいずれも或る語句の説明のために七仏偈が引用されているというだけの事例であって、決して七仏偈そのものを注解しているものではない⁽⁹⁾。例えば第4例（PT 版 p. 186）の場合、これは「許容」anuññāta と「反対」paṭikkhitta という対立語の注釈であるが、その文章は次の通りであって、ここには七仏偈に対する注釈は何も存しない。

Tattha yam āha : sabbapāpass' akaraṇaṃ ti idaṃ paṭikkhittaṃ,
yam āha : kusalass' upasampadā ti idaṃ anuññātaṃ. Idaṃ anuñ-
ñātaṃ ca paṭikkhittaṃ ca.

4 アッタカターに見られる七仏偈

パーリ三蔵すべてに対する直接の注釈書にブッダゴーサ（5世紀前半）の名著である Visuddhimagga（Vism）を加えた文献群、いわゆる狭義のアッタカター文献⁽¹⁰⁾の中で、最初に制作されたのは Vism であった。⁽¹¹⁾その Vism は一方では、これに先行するスリランカ上座部アバヤギリ派のウパティッサの著わした Vimuttimaggā（漢訳『解脱道論』大正、32巻339頁以下）を底本として参照し、他方、その主要なる内容はインド・スリランカにおいて制作伝持されていた大寺派の「古注釈」、いわゆるシーハラ・ソースに基づくものであったことは周知の通りである。その Vism の冒頭、Nidānādīkathā（因縁等の論）において、ブッダゴーサは「三種の善の教え」を説き、そこで次の様に述べている（MD 版 vol. 57, pp. 5-6；PT 版 pp. 4-5）。即ち、

「また戒によって教えの初善なること ādi-kalyāṇatā が解明されるのである。何が諸善法の初であるか？〔それは〕極淨の戒である」という語句及び「諸惡莫作」等の語句によって戒は教えの初めであるからである。そしてそれは後悔しない等の徳をもたらすから善である。〔次に〕定によって中善なること majjhe kalyāṇatā が解明される。何故なら「衆善奉行」等の語句によって、定は教えの「中」であるからである。そしてそれは神変等の徳をもたらすが故に善である。〔次に〕慧によって終善なること pariyosāna-kalyāṇatā が解明される。何故ならば「自淨其意、是諸仏教」という語句及び慧が最上であることより、慧は教えの「終」pariyosāna であるからである。そしてそれは諸の好不好〔のもの〕に対して同一の態度を示すが故に善である〔云々〕。

この一節によって明らかな通り、ブッダゴーサは Vism において問題の七仏偈と、彼が Vism の論構成の根本的教理として採用した、いわゆる戒定慧の「三学」とを結合させているわけである。ところで Vism の先行底本、解脱道論においても、同じくその冒頭の「因縁品」第一の中に「三種善」が説かれている。当該箇所¹²の冒頭は次の如くである。

又以三種善伏道。謂初中後善，以戒為初，以定為中，以慧為後。云何戒為初善，有精進人成就不退，以不退故喜，以喜故踊躍，以踊躍故身猗，以身猗故樂，以樂故心定。比謂初善。定為中善者，以定如實知見。此謂中善。慧為後善者，已如實知見厭患，以厭患故離欲，以離欲故解脫，以解脫故戒自知。如是成就三善道。（大正32卷400頁中）

以上の通り、解脱道論の「三種善」の下りには三学については述べられているわけだが、七仏偈については全く触れられていない。これによって七仏偈と三学とを結合させて三種善を論述したのは、ブッダゴーサ自身の独自の思想であったことが判明する。因みにこの独自の思想は、彼自身の他のアッタカターを含めた全アッタカター並びにパーリ三蔵等の先行文献のどこにも見出されない。

さて次には、その Vism 以外のアッタカターの中の七仏偈についての記述を吟味した。その結果は次の3点に纏め得る。

（1）アッタカター中の七仏偈の引用言及は、七仏偈自身に対する語句の注解を含んでいるものと、引用言及のみの場合とに大別できる。偈に対する注解が見られるのは、Vism の場合以外では、Sumaṅgalavilāsinī, Theragāthā-a（の1例）, Dhammapada-a とであり、七仏偈が引用言及されているだけの事例は、Samantapāsādikā, Udāna-a, Itivutaka-a, Theragāthā-a（の別の1例）, Therīgāthā-a, Buddhavaṃsa-a, Cariyā-a — 172 — パーリ文献に現われたいわゆる「七仏通誡偈」（森 祖道）

pitaka-a などに見出される。⁽¹³⁾ この中、第 1 の事例の中では、Dhp-a の例が特徴的である。これは Dhp 第 183 偈としての七仏偈に対するコメントであって（ただし次の第 184・185 偈と一括して）、ここにはこれら 3 偈が釈尊によって説かれたとされる因縁話が語られている。即ちそれは Ānanda-tthera-uposathapañhavatthu と表題され、アーナンダの問いに答えて釈尊がジェータヴァナにおいて説かれたものとされ、その因縁話とは過去七仏がどの様に uposatha を実行したかについて語ったものである。そしてその中に初めて Vipassin を始めとする、いわゆる過去七仏の名も登場する。またこの種の因縁話は他のアッタカターには全く出て来ない。一方これに対して第 2 の事例では、例えば Sumaṅgalavilāsini に「pāpa を akusala, akaraṇa を anuppādana, kusala を catu-bhūmaka-kusala, upasampadā を paṭilabha, sacittapariyodapana を attano citta-jotana, etaṃ Buddhāna sāsanaṃ の sāsana を ovāda, anusatthi」とそれぞれ 1 ～ 2 の同義語を以って言い換えて説明しているのがその主たる内容となっている。⁽¹⁴⁾ これは言うまでもなく、アッタカターの一部によく見られる、いわゆる最初期のアビダルマ的説明であり、この様な部分は恐らくシーハラ・ソースの中のインド起源の古層に属するものと考えられる。これに対して Dhp-a に見られる説偈因縁話は明らかに後代の新層に属する部分と看做されるわけである。⁽¹⁵⁾

（2）第 2 の特徴点として、七仏偈を引用言及するアッタカターとそれぞれの著作者との関係を探てみると、先にも触れた様に、Vism, Sp, Sv などに出て来ることからブッダゴーサが⁽¹⁶⁾この七仏偈を熟知し活用したことは明らかであるが、しかし出現回数が最多なのはダンマパーラの Paramatthadīpani である。即ち Pd 7 書中、実に Ud-a, It-a, Th-a, Thī-a, Cp-a という 5 書において七仏偈は引用言及されているのである。つまり

ダンマパーラ⁽¹⁷⁾も七仏偈をよく知り、これを多用した注釈家であったことが判明する。また Madhuratthavilāsini : Buddhavaṃsaṭṭhakathā にも七仏偈は現われるので、その作者ブッダダッタ⁽¹⁸⁾もこれに通じていたことがわかる。

(3) 最後に、文献上の特徴的事実として、パーリ文献史において七仏偈に関して、そのソースに2つの系統が存したという点が指摘可能である。これは七仏偈を単独で引用言及しただけの場合には問題とならないが、七仏偈が、前にも触れた様に、Dhp の第183, 184, 185偈と連続して出て来る場合には、その列挙順が重要なポイントとなると考える。即ち上に述べた Dhp における列挙順で3偈が示されている事例の外に、DN に見られる様な、Dhp の偈番号の184, 183, 185という順で示されている事例が数多く見出されるのである。即ち前者の列挙順は Dhp 自身並びにこれを注釈した Dhp-a にのみ見出されるのであるが、これに対して DN に見られる第184, 183, 185偈という列挙順は、DN 自身以外に Smp, Ud-a, Bv-a, Smp-ṭ といったブッダゴサ・ダンマパーラ・ブッダダッタなどの著作に多く見出され、少なくとも量的にはこの方がむしろメインであったと言えるのである。いずれにしても、この様にパーリ仏教内部で既にこの点に関してソースに二つの系統が存在したという事実は大変興味深い問題である。よって他の機会にこの問題を改めて採り上げて論究したいと考える。

5 ティーカーに見られる七仏偈

各種のティーカーに現われる七仏偈の様相は如何がかという問題が次に提起されるわけであるが、これについてはこの小稿ではその全体像の究明は困難である。その理由は、まず第一に今回使用した MD 版には Vism の Mahā-ṭikā と Smp のティーカーの一つである Sāratthadīpaṇi を除く

— 174 — パーリ文献に現われたいわゆる「七仏通誡偈」(森 祖道)

⁽¹⁹⁾ ては、アッタカターのティーカー（復注）は未だ収められてはおらず、他方、PTS よりもティーカーは未だ殆ど出版されておらず、このような事情のため十分なる検討が不可能であったということが挙げられる。第二には、ティーカーにこの問題が取り上げられている場合でも、その注解は通常、七仏偈自身の原文のみならず、それを釈したアッタカターの注釈文をも一括して連続的に注解している例が多いので、当然のことながら、ティーカーのその注釈文全体はかなり長くなり、その内容は複雑となっている、という困難がある。そして最後に、ティーカーの注釈文相互の間に、また時にはアッタカターとティーカーとの間に文章の長い同文関係が見出され、このことが問題の分析検討を一層複雑かつ困難なものとしている。以上の様な事情により、全体としてアッタカターに匹敵するほど膨大な分量で、なおかつそのテキストの出版も未完結であるティーカー文献に関するこの問題の検討は、独立した別箇の問題として扱うのが妥当と考える。しかしそれでも、既に部分的にでも判明している事項だけは次に述べる「結語」の中で必要に応じて言及説明することとしたい。

6 結 語

パーリ文献の中に記述されている七仏偈の伝承の形態と展開の様相は、およそ次の6項に纏めうるであろう。

- (1) 原始仏教時代の最初期の頃に、七仏偈は既に他の多くの偈文と共に制作され、それは先ず本偈のみが Dhammapada の中に収められた。
- (2) 一方で、その七仏偈はこれも他の多くの偈文と同様に、散文經典の中に分散して使用される様になった。Dighanikāya 中の事例がそれであるが、しかしここでも未だ偈文に対する注は見られない。そしてこの様な、七仏偈の本偈のみを引用言及するという傾向は、三蔵以降の後代の文献に

においても見受けられる。また七仏偈は時に Pāṭimokkha の uddesa-gāthā (総括偈) としても用いられる様になった。

(3) 偈文に対する注が見られる様になるのは蔵外の三書ないしはアッタカターに至ってのことであるが、その最初の注釈内容は同義語による言い換えを主とする、極く簡単な最初期のアビダルマの注釈であった。これは現存アッタカターに関してはそのソースとしてのインド起原の古層に属するものであろう。

(4) 七仏偈に対する注解がさらに発達して、やがて他の重要な教理思想と結びつけられた七仏偈の注解が出現した。Nettipakaraṇa における八正道・四諦との結合や Visuddhimagga における三学との結合などがその実例である。

(5) 他方、Dighanikāya 中の記述に既にその萌芽が見られたわけであるが、七仏偈はやがて過去七仏の事蹟とも結びつけられる様になり、その結果、Dhammapadaṭṭhakathā の説く因縁話などが生まれた。

(6) ティーカーにおける七仏偈は、アッタカターにおける記述内容と比較して、概して大幅な発達があるわけではなく、おおむね類似した段階のものと考えられる。ただティーカーの注釈文は七仏偈自身に対するものばかりではなく、アッタカター自身の注釈文をも同時に注釈しているものなので、その内容形式は一見してより複雑な相様を示す様になった。しかしティーカーに現われた七仏偈とそれに対する注釈の全容は未だ十分には解明されてはいない。これは今後の検討課題である。⁽²⁰⁾

注

- (1) (1) *BUDSIR IV on CD-ROM* by Mahidol University Computing Center, Bangkok 1994, (2) *Palitext ver. 1.0 : Buddhist Canon CD-ROM* by Dhammakaya Foundation, Patumthani, Thailand 1996 (PTS 版の三蔵

- のみ所収), (3) *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM Version 1.1* by Vipassana Research Institute, Igatpuri, India 1997 (最近, Version 3 が入手可能となった)。以上の3版の利用価値や使い勝手はいずれも一長一短であるが, それぞれが既に実用の域に達している。なお, 別にスリランカ版のテキストもインターネット上で利用されている様であるが, これは未だミスが多く問題があると聞いている。
- (2) 通常タイ版と言えばタイ王室版のことであるが, この MD 版では王室版が存在しない一部のテキストに関しては, 他のタイ版を使用している。その詳細については, *User Manual : BUDSIR IV for Windows* by Mahidol University Computing Center, Bangkok 1997, pp. 59-63.
 - (3) 従来諸研究の中, 特に原始仏教の倫理思想を全体的に詳論した最近の研究である, 中村元『原始仏教の生活倫理』(中村元選集(決定版)第17巻, 春秋社, 1995年)参照。
 - (4) これらの韻文経典を最古層の仏教文献として, その所説内容に基づいて釈尊自身の仏教(最初期の仏教)を解明した中村博士の研究に対して, 松本史朗氏の下記の批判がある。しかし最古層の韻文経典の所説内容が直ちに釈尊の教説であったのか否かは別としても, それらが現存最古の経典であるとするならば, 少なくともその内容を現存経典中の最古のものと考えすることは差しつかえないであろう。松本史朗「仏教の批判的考察」中の「1. 仏教解明の方法—中村元説批判」(溝口雄三他編『世界像の形成: アジアから考える〔7〕』東大出版会, 1994年, pp. 132-141)。
 - (5) ただしミャンマーでは, この三書は聖典として扱われ, Khuddaka-nikāya の中に収められている。
 - (6) 水野弘元「Peṭakopadesa について」の付説(『パーリ論書研究』水野弘元著作選集 第3巻 春秋社 1996) pp. 140-148。
 - (7) この一節を科段として示したものが, 本学会の学術大会の折に, 駒沢大学の片山一良教授によってレジュメとして発表された。従って本誌所載の同教授の論文の中にはその科段が改めて記されるものと期待しているが, 原文の訳の提示も必要と判断してここに掲載する。
 - (8) なおこの一節に対しては Dhammapāla の Net-a に若干の注釈が加えられているが(PT 版 pp. 221f.), その中で「往古の道」という語句を釈した下りに, 過去七仏第一の Vipassin の名が出て来るのは注目値する。
 - (9) なお, これら3例中の七仏偈に対しては Net-a. には何のコメントも見出されない。ただし PTS 版の Net-a はいわゆる抄本であるので, この場合, コメントは何もないと絶対的には断言できないが, しかしまし何かあったとしてもその内容が特に検討に値するものとは到底考えられない。

- (10) アッタカター文献の種類範疇の広狭等については、拙著『パーリ仏教註釈 文献の研究』山喜房 1984年, pp. 3-15. 参照。
- (11) アッタカターの制作順序については、同上拙著 pp. 92-104.
- (12) Sv (MD 版 vol. 5, p. 76 ; PT 版 II, 479), Th-a (Pd V) (MD 版 vol. 32, p. 16 ; PT 版 I, 14), Dh-p-a (MD 版 vol. 23, pp. 100-101 ; PT 版 III, p. 237).
- (13) Sp (MD 版 vol. 10, p. 214 ; PT 版 I, pp. 186-187), Ud-a (Pd I) (MD 版 vol. 26, p. 319 ; PT 版 p. 298. この箇所は Sāratthadipani, MD 版 pp. 429-30 と同文), Itv-a (Pd II) (MD 版 vol. 27, pp. 353-54, PT 版 pp. 133-34), Th-a (Pd V) (PT 版 II, 213), Thī-a (Pd VI) (MD 版 vol. 34, pp. 259-60 ; PT 版 p. 197 <1998年版>), Bv-a (Md) (MD 版 vol. 51, p. 344 ; PT 版 p. 239), Cp-a (Pd VII) (MD 版 vol. 52, p. 385 ; PT 版 p. 333).
- (14) パーリ・アビダンマの教理的発達の段階・特徴については、水野前掲書 (注 6), その他水野博士の各種の論書研究参照。
- (15) アッタカターの源泉資料 (ソース) の問題については、前掲拙著 (注10) pp. 77-307, 特に pp. 303-7 (及び筆者のその後の研究) 参照。なおソースに関するインド成立の古層についての解明は、拙著によっても、なお不十分 (特にその成立年代論) である。
- (16) ブッダゴーサの生涯及び著作については、前掲拙著 pp. 469-529.
- (17) ダンマパーラの生涯と著作については、前掲拙著 pp. 530-39.
- (18) ブッダダッタの生涯と著作については、前掲拙著 pp. 540-48.
- (19) Vism-mhṭ MD 版 vol. 61, pp. 26-27, p. 390 ; vol. 62, pp. 97-98 ; Sp-ṭ MD 版 vol. 64, pp. 690-91, p. 503 ; vol. 67, p. 181, p. 430.
- (20) なお七仏偈に関連する最近の詳細なる研究として、次の諸論文が存する。
 岩松浅夫「七仏通戒偈について」(『東方』第 2 号 1986年, pp. 31-42), 岩松浅夫「諸悪莫作偈考」(『高崎直道博士還暦記念論集・インド学仏教学論集』春秋社, 昭和62年, pp. 307-326)。袴谷憲昭「七仏通戒偈ノート」(『駒沢短期大学仏教論集』第 1 号 1995年, pp. (5)-(48))。松村恒「波羅提木叉末尾偈について」(『西日本宗教学雑誌』第20号 1998年, pp. 23-36)。